

平成28年度「全国学力・学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立 国本 中学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには、学校の状況や生徒の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があります。その上で、家庭や地域と一体となって生徒を育てることが大切であると考えています。

こうした考えから、平成28年度「全国学力・学習状況調査」における本校生徒の学力や学習状況の概要について、以下のとおり公表します。

また、調査結果は、学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので、調査結果の分析、指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1 目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況等の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査期日

平成28年4月19日(火)

3 調査対象

小学校 第6学年(国語A・B, 算数A・B, 児童質問紙)

中学校 第3学年(国語A・B, 数学A・B, 生徒質問紙)

4 本校の参加状況

① 国語A 124人 国語B 124人

② 数学A 124人 数学B 124人

5 留意事項

(1) 本調査は、対象となる学年が限られており、実施教科が国語、数学の2教科のみであることや、必ずしも学習指導要領全体を網羅するものでないことなどから、本調査の結果については、児童が身に付けるべき学力の特定の一部であることに留意することが必要となる。

(2) 本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区分別の平均正答率などを公表した。

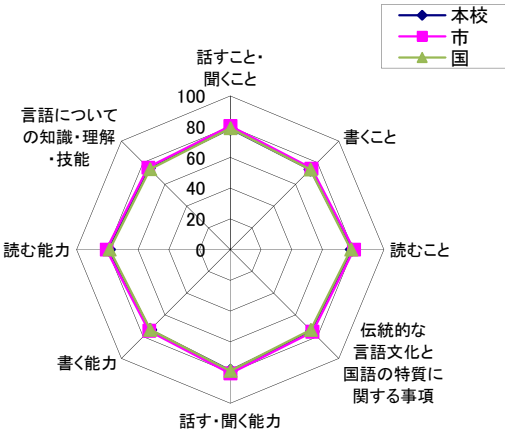
(3) 平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため、「本年度の状況」, 「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立国本中学校第3学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の国、市と本校の状況

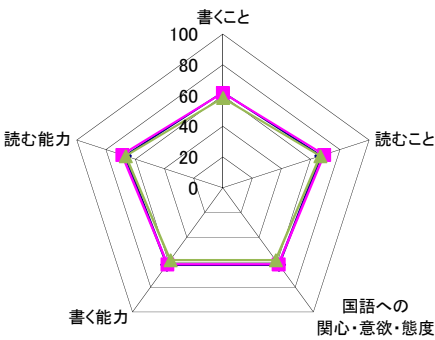
【国語A】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域等	話すこと・聞くこと	78.8	80.5	78.9
	書くこと	73.8	74.7	73.7
	読むこと	79.1	80.5	78.6
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	75.1	75.6	73.9
観点	国語への関心・意欲・態度			
	話す・聞く能力	78.8	80.5	78.9
	書く能力	73.8	74.7	73.7
	読む能力	79.1	80.5	78.6
	言語についての知識・理解・技能	75.1	75.6	73.9



【国語B】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域等	話すこと・聞くこと			
	書くこと	62.0	61.6	58.3
	読むこと	67.2	69.1	66.5
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項			
観点	国語への関心・意欲・態度	62.0	61.6	58.3
	話す・聞く能力			
	書く能力	62.0	61.6	58.3
	読む能力	67.2	69.1	66.5
	言語についての知識・理解・技能			



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

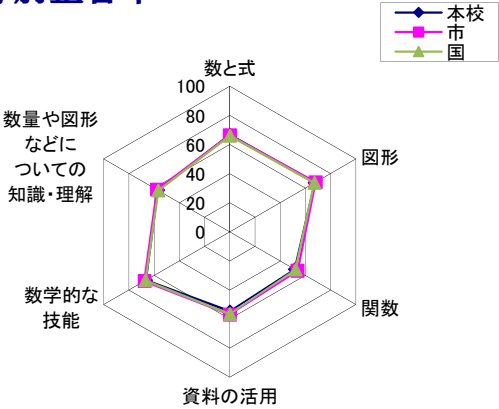
分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
話すこと・聞くこと	○目的に応じて資料を効果的に活用して話す、相手や場に応じた言葉遣いなどに気を付けて話す問題の正答率はよい。無解答率は低い。 ●聞き手をどのように想定して話しているのかを説明したものを選択させる問いの正答率が低い。	・授業では、ホワイトボードを活用して、話し合いの結果を発表させるようにした。話し合いの形態をペアやグループなどその都度変える等工夫した。話し合いの前に注意すべき点を確認しスキルを身に付けさせるようにした。話し合いの際に、メモを取ったり、聞き手が必ず質問する活動をさせ、相手意識を強めていくようにした。また、今後も適宜聞き取りテストを実施し、客観的に自分の力を実感できるようにしたい。
書くこと	○文章を直した意図として正確なものを選ぶ問いの正答率が高い。また、課題を決め、それに応じた情報の収集方法を考える問いは県、国の平均よりも12パーセント以上高い正答率であった。 ●質問に対する答えが明確になるように適切な言葉を書く問いに対しては、平均的な正答率だが無解答率が高い。	・複数の資料を用いて文章を書く練習を授業中に行い、相互に読みあっており、その経験が実際に生きていたと考えられる。短時間であっても三行以上の文を書き、生徒間で交流、クラスで発表する機会を設け、意識を高めさせたい。また、目的、相手を意識させ文を書く機会を作っていきたい。
読むこと	○正答率はどの問もほぼ平均値の前後である。 ●資料を活用するときの留意点を説明したものとして適切なものを選択する問題の正答率が低い。本文だけでなく資料の特徴を読み取る力の育成が必要である。	・ブックトークや朝の読書などを通して読書習慣が身につけており、読み取ることにに関しては見当はずれの解答が少なくない。一方で文章以外の資料やグラフを読み取る力が十分でない。多彩な資料を読む機会を増やし、複数の資料を合わせて読めるような力を育てていきたい。また、文章の構成に留意し読み取る機会を設けていきたい。
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	○慣用句の問題の正解率が高い。 ●漢和辞典に関する問題の正答率が低く、授業で辞書を活用する機会を設けることが求められる。	・慣用句は授業で慣用句かるたを作り、実際にかるた取りをすることで知識が定着したと考えられる。また、文の成分等時間をかけて取り組んだ分野の正答率が高い。漢字練習、小テスト等を定期的に行い、理解言語から使用言語への転換を図りたい。

宇都宮市立国本中学校第3学年【数学】分類・区分別正答率

★本年度の国、市と本校の状況

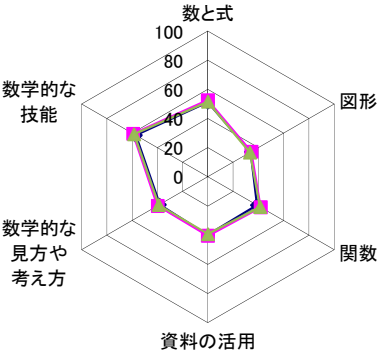
【数学A】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域	数と式	66.5	66.4	65.9
	図形	67.4	68.1	67.1
	関数	51.6	53.7	52.0
	資料の活用	54.7	56.9	56.5
観点	数学への関心・意欲・態度			
	数学的な見方や考え方			
	数学的な技能	66.7	67.8	66.9
	数量や図形などについての知識・理解	57.2	57.8	56.8



【数学B】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域	数と式	51.2	52.7	51.5
	図形	34.0	34.5	33.3
	関数	38.9	41.9	41.4
	資料の活用	39.8	40.5	39.3
観点	数学への関心・意欲・態度			
	数学的な見方や考え方	38.2	39.9	38.9
	数学的な技能	57.2	59.2	58.5
	数量や図形などについての知識・理解			



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と式	○不等式を読み取る、1次方程式を解く、具体的な場面で比例式を作るなどにおいて、基本的な意味を理解して数学的な技能を身に付けている。 ○活用の場面で、式をもとにその事柄が成り立つ理由を説明することができつつある。 ●活用の場面で、与えられた式から解決する方法を数学的に説明する問題の正答率が低い。	・新しい学習内容に入る際には、既習事項をおさえた板書を工夫し、基本的な知識・理解の定着を図る。 ・教科書の「補充の問題」を活用し、繰り返し練習ができるようにする。 ・立式した際には、その理由を発表したり、その式の意味を考えたりする活動を設ける。
図形	○空間図形の成り立ちや、見取り図の読み取り、多角形の角など知識・理解に関する問題の正答率が高い。 ●証明問題での記述の正答率が、他の図形に関する問題に比べて非常に低い。	・証明問題については、「図を見れば分かるのに、何を書いたらいいか分からない。」という苦手意識が強い。条件の整理の仕方や、着目すべき性質や関係を見い出す活動を取り入れる。結論から仮定、仮定から結論の両方向から考えて証明する場面を設定する。
関数	○比例関係の特徴をとらえて表を完成させる問題の正答率が90%以上である。 ●1次関数に関わる問題の正答率が、比例・反比例の問題や市の平均と比べて低い。 ●活用問題で、グラフを用いた説明をしたり、式から事象の関係性を説明したりすることができない。	・表・グラフ・式の特徴について、関連付けて理解できるように、表からグラフの傾きや切片を読み取る活動や判断する活動を設定する。また、視覚的に捉えやすいように板書を工夫する。 ・具体的な事象において、2つの数量の変化や対応を調べる活動を大切に、式やグラフに表すことのよさについて触れる。 ・傾き、切片、増加量、変化の割合など基本的な用語の意味を繰り返しおさえる。
資料の活用	○カードに関する確率問題の正答率は80%である。 ●しかし、無解答率が11%あり定着度に差がある。 ●近似値と誤差、最頻値などの意味が理解されていない。	・資料の代表値について理解を深めるために、代表値の必要性和用語の意味をおさえる。 ・代表値として何がふさわしいかを考察する活動を取り入れ、資料の傾向を説明するなどの表現力を養う。 ・確率では、場面を把握して順序よく起こり得る場合の数を数え上げるために、樹形図やパターン分けなど具体的に書き出させるようにする。

宇都宮市立国本中学校第3学年生徒質問紙調査

★傾向と今後の指導上の工夫

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

○本校が一番誇れることは、「ボランティア活動に参加したことのある割合」である。本校平均は74.2%であり、県平均49.5%、全国平均の48.7%を大きく上回っている。地域にはボランティア団体もあり、多くの生徒が加入していて地域に貢献している。国本地区は指導者がたくさんいて、中学生へのリーダー訓練が充実している。ボランティアで培われた資質は、卒業後も地域に貢献していくことはもちろん、生涯生きる力として発揮されると思われる。

○学習面では、「好きな教科がある」生徒が約70%で、県平均の58.8%、全国平均54.7%を大きく上回っている。学習全般に興味関心があり、授業態度も良好なことから、アンケートでも予想通りの結果であった。

○「自分には、よいところがあると思いますか？」の質問において、「当てはまる」の肯定的割合が76.6%である。県平均73.9%、全国平均の69.3%を上回っている。その要因として、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか？」の質問で、肯定的割合が84.7%で、県平均の82.4%、全国平均の78%を上回っていることがあると思われる。誉めて伸ばす教育方針は、1年の時から学年で取り組んでいるので、今後も自己肯定感のある生徒を育てていきたい。

●反面、学力と生活面の向上を阻害する要因として、ゲームとスマホの長時間使用があげられる。4時間を越えてゲームをしている割合が本校平均で13.7%である。県平均の7.6%、全国平均の9.7%を上回っている。スマホの利用時間も4時間を越えている割合が本校平均で12.9%である。県平均の5.8%、全国平均の8.6%を上回っている。ゲームとスマホの長時間使用が家庭学習の時間を不足させたり、睡眠不足による学校生活の質の向上を妨げたりする原因になっていることは明らかである。家庭生活のほとんどの質問項目が肯定的な回答であり、全国平均を上回っている。一部の生徒とはいえ、受験生にとっては、早急に改善しなくてはならないことである。学級活動や学年集会での啓発はもとより、保護者会や学年通信などで、保護者にも協力を呼びかけたい。